

一般発表抄録

1 摂食嚥下障害患者に対する大学病院との連携

河野雅之, 牧野真理, 小林智美

明倫短期大学 附属歯科診療所

keywords : 摂食嚥下障害, 嚥下内視鏡検査, 嚥下造影検査

はじめに

「食べる」ことは人間の基本的欲求である。摂食嚥下障害は、この欲求を楽しみながら満たす手段を奪うものであり、医療従事者として取り組んでいかなければならない大きな課題の一つである。今回、新潟大学医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科と連携をとり、摂食嚥下患者の評価、診断、治療を行った一例について報告する。

対象および方法

明倫短期大学附属歯科診療所外来受診の摂食嚥下障害患者一名。

- ①明倫短期大学附属歯科診療所外来にて嚥下機能評価
- ②新潟大学医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科にて嚥下内視鏡検査, 嚥下造影検査
- ③明倫短期大学附属歯科診療所外来にて間接訓練
- ④新潟大学医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科にて嚥下造影検査 (再評価)
- ⑤明倫短期大学附属歯科診療所外来にて間接訓練

結果および考察

明倫短期大学附属歯科診療所外来にて行った嚥下機能評価にて嚥下機能は低下していることは分かったが咽頭部がどのような状態であるかは分からなかった。そこで新潟大学医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科宛に紹介状を書き、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査の依頼を行った。検査により「右側の梨状窩に残留あり、残留物の誤嚥ある。左回旋嚥下で追加嚥下すると、残留除去が可能。軟口蓋や喉頭運動は明らかな左右差なし。」という結果が得られた。そこで対策として間接訓練(頭部挙上訓練、舌挙上訓練)を明倫短期大学附属歯科診療所外来に

て2週間ごとに行い、食事中の一口量の調整、残留除去のために左回旋嚥下を適時追加した。3ヶ月間の訓練後再評価のため再度嚥下造影検査を行った。経過良好であったため2週間ごとの外来受診を継続させた。最初の嚥下造影検査から1年経ったところで再評価のため再度嚥下造影検査を予定していたが直前に脳梗塞を起こし緊急搬送され、現在入院中である。

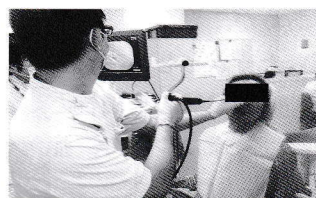


図1 嚥下内視鏡検査

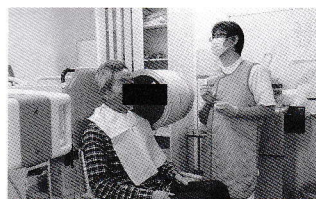


図2 嚥下造影検査

まとめ

新潟大学医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科と連携し、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査を行ったことで咽頭の評価を行い、訓練を行うことで症状は改善された。しかし、ラクナ梗塞の可能性を患者に伝えCT検査を勧めたが患者の同意を得られず、嚥下障害の原因疾患は不明なままであった。主治医と直接連携をとり、原因究明のためCT撮影をしていたら脳梗塞を未然に防げたかもしれない。主治医と連携し、症状の改善だけではなく原因疾患を確定させることも必要だと感じた。